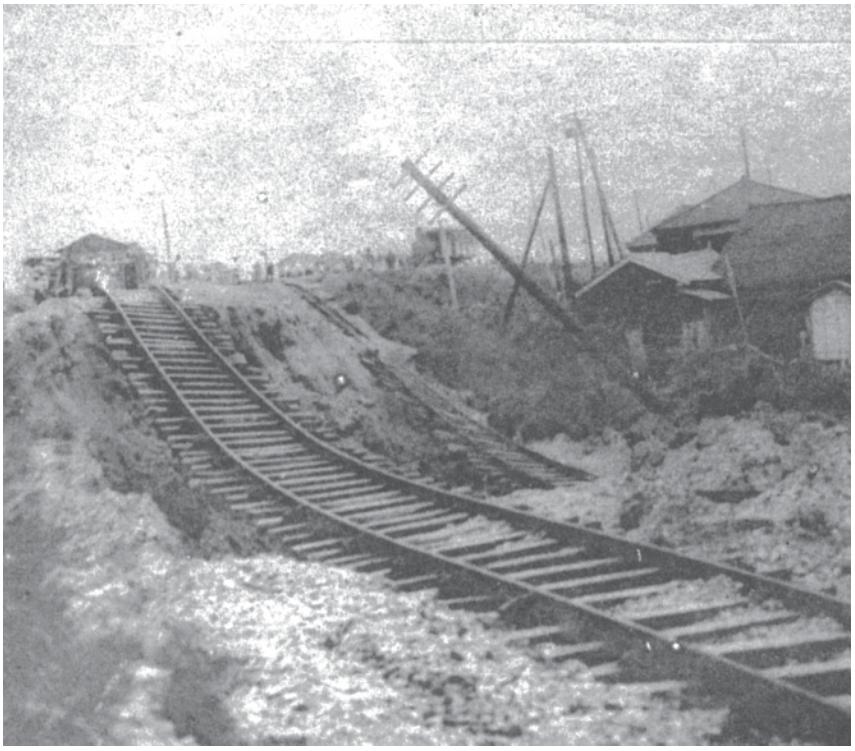
もくじ
関東大震災と千住町 … P1　お化け煙突60年－発電の仕組みと装置① … P3
文化遺産を伝える史跡③　江戸と明治を伝えた名倉医院 … P4

足立史談
第666号
2023年8月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
ＴＥＬ 03-3620-9393
ＦＡＸ 03-5697-6562

関東大震災と千住町

佐藤　貴浩



『大震災千住町写真帖』所収
「東武鉄道綾瀬川鉄橋以西ノ被害状況ニシテ線路ノ陥没シタルヨリ見ルモ此一帯ニ亘リテ地盤ノ低下シタルガ如キ感アリ」

今年は、大正十二年（一九二三）九月一日午前一一時五八分に関東大震災が起こってから一〇〇年という節目の年である。

筆者は、大正十三年五月に千住町庶務課が発行した『大震災千住町写真帖』（足立区立郷土博物館所蔵）の紹介をしたことがある（本誌五九五号「関東大震災と足立―『大震災千住町写真帖』―」※以下『写真帖』）。

一〇〇年という節目の年を迎えた今、前稿では触れなかった点を中心に、その他の研究も交えながら、あらためて足立区における関東大震災の状況についてみてみたい。

■南足立郡の被害と供養塔

関東大震災は、十万人を超える死者・行方不明者が出た。南足立郡（現足立区域）でも死者八九名を出している。千住町で二八名、西新井村で四八名が亡くなった。

西新井村で多くの死者が出たのは、東京紡績西新井工場で崩落事故が起きたためである。工場で亡くなった人々の遺体は、満願寺（栗原三―六―六）に安置された。そのため、満願寺には供養塔が建てられている。

千住町は東京市内からの避難者で溢れ、千住町はその対応をするため、不動院（千住一―二―二）に天幕を張った仮事務所を設置し、炊き出しなどの救護にあたった。こうした経緯から、不動院にも供養塔が建てられた。

■布団の調製

被災者・避難民で溢れた千住町は、布団が足りないという問題が発生した。

そのため東京府は、布団の材料を準備し、専門家に製作を依頼しようとした。しかし、南足立郡では時間と経費がかかるということから、郡視学（教育を担当する地方行政官）が千住町の小学校長と協議し、生徒に布団を調製させることとした。『写真帖』には、「義侠的観念ト同情心ノ向上ヲ計リ一面経費ノ節約及追々寒冷ヲ覚ヘ来タリ避難者ノ寒苦ヲ想ヒ片時モ早ク配給セントノ趣旨」だったとある。結果、専門家による講習を受けた高等科（現在の中学校）一六六人、尋常科六年生（現在の小学校六年生）二〇〇人、篤志婦人五人、教員三五人によって、わずか一週間の間に一〇六五組の布団を調製することに成功したのである。

この取り組みは、被災者に対する支援を教育の一環とし、経費を削減したうえ、迅速に被災者に布団を供与することができるという一石三鳥ともいうべき事業であった。千住町民は、自身も被災者でありながら、多くの避難民救助に尽力したのである。生徒たちの心のこもった布団は、さぞ暖かかっただろう。

■鉄道の被害

さて、冒頭に掲載した『写真帖』収録の写真は、現東武伊勢崎線堀切

駅周辺、おそらく現、荒川内とみられる場所を写したもので、一見して明らかなように、伊勢崎線の運行は不可能となった。地震の被害の凄まじさをよく物語っている写真である。こうした凄まじい地震の被害により、東京府の交通・通信が途絶してしまう。

写真の説明文は、地盤沈下したかのようだと書いてあるが、これは盛土が崩壊した状態を写したもので、三〇〇メートルに及んだという（草野　一九八九年）。

東武伊勢崎線は、浅草駅が延焼するなどの被害があったほか、荒川にかかる鉄橋に大きな被害があり、浅草―西新井間が九月二十二日に復旧するまで不通となった。同じく荒川放水路にかかる鉄橋を通過する常磐線は、北千住―金町間が九月三日に復旧している。北千住―南千住間も九月四日に復旧しており、常磐線は比較的早く復旧した（田中正敬　二〇一九年）。

『写真帖』には、鉄橋の写真も掲載されているが、その解説には「荒川放水路ニ架カレル常磐線及東武線ノ鉄橋被害ハ東武線多クシテ十数日間列車ノ運転不能トナリ北千住側鉄橋際ヨリ徒歩連絡ヲナシ頗ル困難ト混雑ヲ見タリ」と記されている。

■戒厳令と鉄道

九月二日に戒厳令が発令され、南足立郡も対象地域となった。戒厳令に伴って、震災救護事務従事者や救護品については、鉄道を無賃で利用できるようになった。しかし、その他は、原則として震災地域に入ることはできなくなった。一方で、罹災民が地方に移動する場合は、無賃で利用できた（田中正敬　二〇一九年）。復旧の早かった常磐線を利用した移動も多かったものと推測される。

■通信の途絶

東京地区の電信・電話といった当時最新の通信は、ケーブルの被害や電源の喪失などにより、壊滅状態となった。そのため、通信は徒歩・自動車・飛行機・伝書鳩などに頼らざるを得ない状態であった。しかし、横浜港内外にいた十数隻の船の無線は生きており、発災から三十分後、銚子局を経由して各地に被害の情報が伝えられていった（田原啓祐　二〇一二年）。

こうした中、東京海軍無線電信所船橋送信所も各地に無線を送っている。二日午前七時十五分発の一部を紹介する〔「公文備考　変災災害４巻１５６〈通信関係〉（６）」〈アジア歴史資料センター〉※原文は全文カナ書きだが、読みやすく改めた〕。

火災ナオ猛烈ニシテ、既ニ千住ヨリ品川ニ及ビ、爆発頻出紅蓮ノ炎本所ヨリ見ユ

無線によれば、千住から品川まで猛烈な火災に見舞われていたという。

■千住町の火災

現在では関東大震災という呼称が一般的だが、当時は大震火災と呼ばれることも多かった。尋常ならざる火災の被害が強調された名称である。

震災直後、千住町では三か所で火災が発生し、二か所はすぐに鎮火している。残る一か所の日本製靴株式会社では、工業用ガスが発火し大炎上したが、『写真帖』によれば二日午前二時に完全鎮火している。つまり、無線が発せられた二日午前七時十五分には、千住の火災は鎮火していたのである（市内の大火も二日午前六時頃におおむね鎮火していた。完全鎮火は三日午前十時）。

無線からは、当時の緊迫した状況が伝わってくるが、通信網が壊滅的な打撃を受け、正確な情報がわからない中で発せられた無線の内容には問題があったのである。

なお、東京海軍無線電信所船橋送信所は、救援要請を行い多くの人を助けたが、朝鮮人暴動という不確かな情報を広めてしまったことでも知られている。

■通信網の復旧

千住町の通信を担っていたのは、千住郵便局であった。千住郵便局は、現在、千住中居町に建築家の山田守が建てた旧千住郵便局が現存しているが、これは昭和五年に建てられたもので、震災当時は千住二丁目に位置していた。千住郵便局は、幸い小破だった。

震災当時、大正天皇は日光御用邸に滞在中だったが、二日午後十一時に日光御用邸と千住郵便局との間で電話回線が復旧している。電話回線としてはもっとも早い復旧であった。そして、三日早暁には千住―仙台間と千住―大阪間の電信線が開通し、午前七時に千住局から仙台局を経由して、各地の逓信局長および地方長官に宛てて震災の詳報が伝えられた。千住から発せられた電信は、震災後東京から初めての電信となった（田原啓祐　二〇一二年）。

関東大震災は多大な被害をもたらしたが、千住町は様々な取り組みで避難者の救助にあたった。また、東京府内の交通・通信が途絶する中で、千住町はいち早く復旧し、全国に情報を発信していったのである。

【参考文献】
草野郁「関東地震における東京低地の液状化履歴」（『土木学会論文集』四〇六、一九八九年）
田原啓祐「関東大震災後における逓信事業の復旧と善後策」（『逓信総合博物館研究紀要』四、二〇一二年）
田中正敬「関東大震災における鉄道の被害と復旧―国有鉄道の「震災日誌」を手がかりとして―」（『専修大学人文科学研究所月報』二九八、二〇一九年）

（文化財係学芸員　佐藤　貴浩）

お化け煙突60年

発電のしくみと装置①

千住火力発電所の元職員、格和宏典さんに文章をお寄せいただいています。

■発電のしくみ　本館建屋内は、汽缶＝ボイラー、汽機＝タービン、電機の機器が設置され発電所の心臓部でした。貯炭場の石炭をバケットエレベーターで屋上階に上げ、自重で階下のボイラーに落下させ燃焼させます。ボイラーで作られた蒸気をタービンに送り回転させると、タービンに連結した発電機も同時に回転し発電します。発電した電気は屋外変電所から各方面に送電されました。

※本編ではボイラーを缶（かま）と呼ぶこともあります。各設備については回を追って説明します。

■ボイラー　ボイラーとは、密閉した容器の中に圧力の高い蒸気を発生させて動力のもととする装置を言い、一般に汽缶、ボイラーと言いますが、現場などでは親しみを込めて、缶（かま）と呼んでいるところもあります。

千住火力は、この缶が12缶（かん）あり6缶ずつA・Bの2室に分けられ、3缶ずつ向かい合っています。ボイラー10缶を使用し、2缶は故障時対応の予備としていました。この10缶の蒸気を一か所に集め、タービン・発電機3基を回転させていたので、多機多缶式（たきたかんしき）といいましたが、現在の火力はひとつのタービン・発電機をひとつのボイラーで回転させるため、一機一缶式（いっきいっかんしき）と呼んでいます。千住火力は石炭の塊をそのまま燃焼させていましたが、新鋭火力は小麦粉のようにすりつぶしバーナーで噴射し燃焼させています。その方が燃焼効率が良いからです。

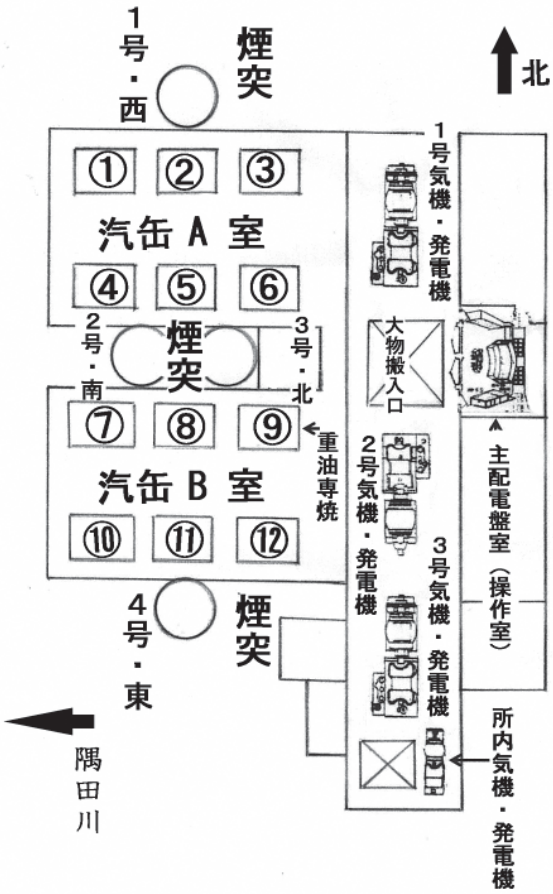
千住火力のボイラーは、米国のバブコック&ウイルコックス社製で、舶用型水管式ドラムボイラーといい、圧力17．6kg／㎠g、蒸気温度330℃、発生蒸気量27t/h～41t/hで、炉内は耐火煉瓦積みでした。

大正一五年一月に6～12号缶が、昭和二年に1～5号缶が運転を開始しましたが、9号缶は、昭和二八年十一月に重油専焼に改造されたほか、老朽化により蒸気発生量が減少してきたので缶の裏側に重油助燃装置が取り付けられました。取り付け年は不明です。

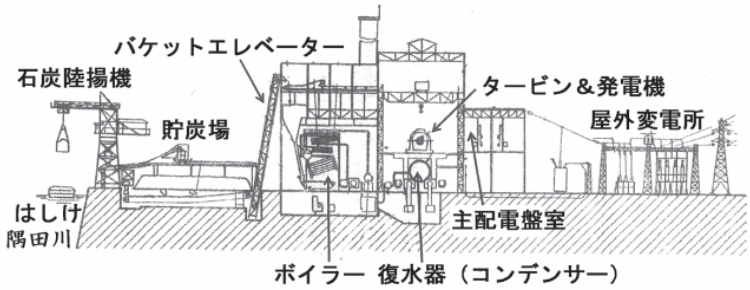
石炭を送りながら燃焼させる装置をストーカー（stoker）といい、キャタピラを横繋ぎし、2・13メートル幅にしたものを一つの缶に3基取り付けてあり、缶前（かままえ）から缶裏までは4・88メートルありました。

ストーカー（stoker）は、給炭機や火夫（かふ）、缶焚き（かまたき）＝ボイラーマンの意味です。英語だと発音が異なりますが日本語だと同じになってしまう、特定の人へのつきまといという意味のストーカー（stalker）が近年は認知度が高いようです。元火夫として複雑な気持ちです。

つづく



［図1］　汽缶・汽機・煙突配置図



［図2］　発電所断面図

※復水器（コンデンサー）＝汽機で使用した蒸気を隅田川の水を使った熱交換により冷却し、温水にする装置のことで、ボイラー水として再使用します。正しくは、表面冷却式復水器と呼んでいました

文化遺産を伝える史跡③

江戸と明治を伝えた名倉医院

多田文夫

嘉永元年（一八四八）に建てられた長屋門と主屋等が江戸の風情を伝えるのが、千住五丁目にある名倉医院です。名倉家の歴史と文化から、足立区の登録文化財、記念物（史跡）「千住名倉医院」となっています（昭和五十九・一九八四年）。

■千住宿の旧家　名倉家は千住の古典籍「旧考録」に「旧家」であると記述され、寛政年間（一八七九～一八〇一）には千住宿の宿役をつとめていたとも記されています。名倉家の記録『名倉姓譜小考稿』（名倉重雄著、昭和三・一九二八年。私家版）によると、遅くとも元禄十年（一六九七）までに名倉重直が千住に移住し居を構えたとしています。

「名倉」という名前は「骨接ぎ」（骨折治療）の代名詞でしたが、その骨接ぎを創始したのが「業祖」（ぎょうそ）と言われる名倉直賢（なおかた・一七五〇～一八二八）でした。直賢は元もと武術（柔術）を得意とした人でしたが、骨接ぎを創業したと記しています。創業年は明和七年（一七七〇）とされ、現在も整形外科として伝統を引き継いでいます。

■文化の蓄積　直賢は名乗りを「彌次兵衛」といいますが、浮世絵師、葛飾北斎との交流の言い伝えが知られています。『葛飾北斎伝』（明治二六・一八九三年、蓬樞閣版。国立国会図書館デジタルコレクションを利用）の記述で作画に用いる骨格の知識を「接骨家名倉彌次兵衛に学んだ」とあるのが根拠です。現在は北斎自身の遺品は見出せませんが、北斎門人の昇亭北寿による直賢の肖像（**右の挿図**）や他の画幅が伝来しており、北斎一門との交流が確認されています。

■江戸から明治の文化遺産　平成二六年（二〇一四）、名倉家のご厚意により郷土博物館で調査を行ったところ、琳派の酒井抱一や村越其栄の作品をはじめ岡倉天心の書簡、さらには浮世絵など江戸から明治の美術資料が多数確認されました。種類も数量も多岐にわたり、平成三〇年（二〇一八）度の文化遺産調査特別展『大千住美の系譜―酒井抱一から岡倉天心まで―』をはじめ幾度かの展覧会で皆様に資料や作品をご覧いただいています。

史跡となっている名倉家の屋敷（**左写真**）は一七五年前の建物です。前項の文化遺産は主屋や蔵で伝えられましたが屋敷の維持は名倉家の不断の努力によっています。ご当主の名倉静様とは博物館の地域調査の頃から現在まで二〇年を超え、ご理解とご協力をいただいています。

■徳川家祥の来訪　この屋敷は江戸幕府の十四代将軍、徳川家定が将軍になる前、家祥（いえさき・いえさち）と名乗っていたころ、千住遊覧の際に小休所とすることを幕府から指示され、直賢の孫、尚壽が整備しました。

徳川家の利用が記録されているのは三回です。①嘉永元年十一月十八日、②嘉永三年（一八五〇）正月九日、③嘉永四年（一八五一）の同じ正月九日です（『続徳川実紀』『旧考録』）。

以上の通り、名倉家の屋敷―名倉医院―は徳川将軍家の遺跡であるとともに、多くの文化遺産を伝える拠点であることは希少かつ貴重と考えます。

（学芸員・文化遺産調査担当係長）

一日だけの広重展

浮世絵師歌川広重の命日に、広重の墓所を祀る東岳寺にて、広重の事績をたどるパネル展を開催します。

日にち　9月6日（広重忌）
開　場　午前10時から午後4時30分（入場は午後4時まで）
会　場　東岳寺客殿
伊興本町一・五・一六
入場無料　ご自由に御覧ください
問先　郷土博物館
電話　03（3620）9393